「いただきます」を世界に

ケニア出身の環境活動家であったワンガリ・マータイさんが、地球環境に負荷をかけないライフスタイルを広げるために、「もったいない」という日本語を世界に広げ、ノーベル平和賞を受賞したことは記憶にあたらしい。環境３Ｒ（reduce削減、reuse再利用、recycle再資源化）にもう一つのＲであるrespect（尊重、大事にする）を加えたところに「もったいない」の真髄があり、世界共通語とする価値があるといえる▼先日、スウェーデンに足を運び、現地在住約四五年となる日本人と酒を酌み交わし懇親した。その際、あなたならどんな日本語を世界共通語にしたいかという話しになった。とっさに浮かんだのが「いただきます」であった▼海外に行くたびにとまどう一つが食事の始まりの挨拶である。アルコールが入ることがほとんどであり、「乾杯」（スウェーデン語では「スコール」）でつい間に合わせてしまっているが、乾杯なしであればキリスト教社会では主の祈りを唱えることになるのであろう。あくまで人間に食を与えてくれた神様に感謝をささげるものである。これに対して「いただきます」は食材となったお米、野菜、畜肉等の生命をいただくことへの恐れと感謝の念の表現である。生き物の生命をいただくことなくして人間は生きられない、悉皆成仏、輪廻転生の世界での人間のおごりや横暴を戒める▼食や農産物の商品化が進行し、生命はなおざりにされるばかりである。手をあわせての「いただきます」の姿は美しく崇高でもある。この心を世界が理解するようになることを切に願う。（土着菌）